

■ パネルディスカッション ■

『新時代の道しるべ～地域での取組・実践から』

深まった建設業への理解と関心
より確かな成果に向け、さらなる実践

担い手確保・育成へ



平沢氏



小笠原氏



渡辺氏

「情報発信のチャンネルを」

第34回北海道建青会全道会員大会(27日、函館国際ホテル)では、「新時代の道しるべ」地域での取組・実践から」をテーマに、パネルディスカッションが行われた。担い手確保・育成への対応について、函館建青会と函館高専の連携・交流を通じた成果と課題を明らかにし、今後の活動の在り方を議論。i-Constructionを媒体に、土木・建築工学の専門的知識がない女性でも建設業で活躍しているという事例からは、ICTが働き方改革にもたらす効果や女性が活躍できる環境づくりといったことも含め、新しい建設業の働き方の可能性について認識を共有した。

建青会と高専の取組の成果と課題

複数の取組で距離縮まる

渡辺 高専とのかかわりは3年前の現場見学会から始まった。見学会自体は一般的な内容だが、これを契機に共同でいろいろな事業を進めることになった。その1つが1昨年からは始めた企業インタビュー。もともとは校内の教職員を対象に学生がインタビューして、その結果を発表する

というものだったようだが、平沢先生が会員企業と学生が直接やり取りする場として、インタビューを活用できるように配慮してくれていた。一昨年は、5年生を対象とした特別授業も行った。出前授業と異なるのは、数日わたって複数のコマを講義を展開したというところ。1コマ90分の授業を2、3人で分担し、合計5コマの講義を5日間にわたって行った。

1日限りではなかったが、学生たちは疑問などがあれば、次の日に確認することも可能で、より理解を深めてもらえたのではないかと。私たちにしても、自分たちのことを伝える訓練の場ともなった。昨年12月には、社会基盤工学科の学科講演会に協力

し、私と会員企業の技術職員がパネリストとしてパネルディスカッションに参加した。テーマは「地域建設業の魅力」で、2年生から5年生まで計140人に対して建青会の活動や地域建設業が果たしている役割、仕事のやりがいなどについて発信する場となった。お隣の小笠原さんと同期の女性もパネリストの1人として参加されたが、その方はその年の春に卒業したばかりで、自らの就職活動の体験なども紹介していた。顔見知りの先輩から実体験を伝えてもらうことで、より興味や関心を寄せてもらえたのではないかと

思う。私たちの活動に学生さんが協力してくれるという動きも出てきている。函館では消防車やパトカー、建設機械など100台以上が集結する「はたらりのりもの大集合」という大規模なイベントが毎年開催されており、私たちも2014年から参加している。一昨年からは平沢先生と学生がボランティアで参加し、私たちの手伝いをして、私たちが魅力ややりがいを感じてもらえているの

ではないかと思う。最も大きかったのは平沢先生の存在。企業インタビューも、特別授業も、学科講演会も先生の働きかけがあれば、私たちが参加

「取組通じ不安少なくなった」

する場面はなかった。学生が日々接する先生が、地域の建設業のことを学生に理解してもらおうという意識を持ってきている意義は、とても大きいと思う。

地元への志向 学校にも望ましい 平沢 学校にとって望ましい就職の姿は希望者が100パーセント就職できること。希望できる会社が多い、選択肢の幅も広い方がいいが、現状をみると東京や札幌の大手志向が強い。その一因には、地元の企業のことをよく知らないというところがあるのではないかと

公務員志望から 建設業へ 小笠原 特別授業では、建設業が地域の暮らしと密接にかかわっていることや災害が起きたときにいかに役に立つこと、現場代理人の仕事の内容及び安全、安全管理、i-Constructionなどについて説明を受けた。企業説明会などでは、時間の制約があり、説明していることも限られている。特別授業では、聞きそびれたことがあっても1日だけの授業ではなかったため、つぎの授業のときに確認することができ、とても理解が深まった。

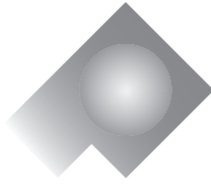
公務員志望から 建設業へ 小笠原 特別授業では、建設業が地域の暮らしと密接にかかわっていることや災害が起きたときにいかに役に立つこと、現場代理人の仕事の内容及び安全、安全管理、i-Constructionなどについて説明を受けた。企業説明会などでは、時間の制約があり、説明していることも限られている。特別授業では、聞きそびれたことがあっても1日だけの授業ではなかったため、つぎの授業のときに確認することができ、とても理解が深まった。

地元の企業に就職する先輩が少なかつたので不安もあったが、先輩が就職する際に同じ不安を抱かないよう、少しでも選択肢の幅が広がる手助けになればという気持ちもあって、建設業への就職を決めた。建青会さんとかかわりを通して、自分身の不安も少なくなりました。安心して地元企業に進むことができました。平沢 最近3年間の就職状況をみると、1昨年の地元への就職は4%、昨年は

怖いのは成果を求め過ぎる、急ぐこと。息の長い取組として一緒に継続的に活動を進めていきたい。学生は求人票、SNS、口コミ、CM、ホームページなどから得る情報を総合的に判断して希望を決定する。情報のチャンネルは、多く用意しておく方がいいのではないかと思う。

地元への深い共感 うれやましい 森本 弊社は大阪と東京で操業しているが、数えきれないほどの建設業者が存在しており、業界を志望される学生にとって違いがわかりづらい。だからこそ差別化が必要で、弊社が「違い・特徴」を積極的に発信していく背景もそこにある。学生にとっても、企業にとっても、地元という共通認識のもと、深い共感を感じた。私たちが思うように

- ◆コーディネーター
(株)北海道通信社取締役函館支社長 石橋卓也氏
- ◆パネラー
三和建設(株)専務取締役 森本和則氏
函館工業高等専門学校社会基盤工学科教授 平沢秀之氏
齊藤建設(株)i-Constructionプロジェクトチームスタッフ 中村理絵氏
(株)菅原組工事本部工事部員 小笠原聖氏
北海道建青会会長 渡辺一史氏



価値創造

～魅力ある産業へ、選ばれる企業へ～

第34回 北海道建青会全道会員大会